

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：34416

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820068

研究課題名(和文) 石刻史料による遼代漢人徙民の研究

研究課題名(英文) a research for the "hanren" immigrants in the liao dynasty period from the inscription materials

研究代表者

毛利 英介 (Mori, Eisuke)

関西大学・アジア文化研究センター・非常勤研究員

研究者番号：10633662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、遼代のいわゆる漢人の存在形態について明らかにすることを目的とした。具体的には、契丹内地に居住する漢人と燕雲十六州に居住する漢人ではそのあり方が異なるのではないかという仮定を明らかにしようとした。その際、漢人がどの程度契丹語・契丹文を使用したかを一つの指標とした。方法としては、中国の遼寧省と内モンゴル自治区での現地調査に基づきつつ、石刻資料を利用して研究を進めた。その結果、燕雲十六州に居住する漢人に比して契丹内地に居住する漢人はより契丹語・契丹文を使用する可能性が高く、契丹人・契丹国家との距離感が近いことを明らかにできたと考える。

研究成果の概要(英文)： This research program aimed the investigation into the existence form of so-called Hanren in the Liao dynasty period. Concretely speaking, the hypothesis was examined to prove that there was difference between the situation of the Hanren in the Yan-Yun sixteen prefectures and the mainland of Khitai. At that time, it was paid much attention to what degree they can use the language of Khitai. The research was carried out, mainly using inscription materials, some of which were acquired through the field work in the Liaoning province and Inner Mongolia.

As the result of the research, it was proved that, compared with the Yan-Yun sixteen prefectures, more Hanren in the mainland of Khitai were probably able to use the Khitai language, and they existed in the near place or situation of the Khitai people or the Khitai government.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：東洋史

キーワード：契丹 遼 墓誌銘 漢人

1. 研究開始当初の背景

そもそも研究代表者は、契丹史の研究には二つの意義があると考えている。

第一には、東西に高麗と西夏を従え、南に北宋と形式的には対等かつ軍事的には優越した関係を築いた国際関係上の地位である。

第二には、契丹が続く金・モンゴル・清といういわゆる征服王朝の雛形であり、さらには清朝の版図を実質的に引き継ぐ多民族国家・現代中国の背景ともなる点である。

さて本課題研究開始当初の背景であるが、その第一点は以下のようなものである。研究代表者は従来主に上記の第一の意義による視点から研究を行ってきたが、その間に両者が無関係でないことを痛感した。即ち、五代華北から契丹へは自主的な亡命や捕虜としての連行などを含めて様々な形で人口移動が存在したが、1004年の澶淵の盟締結による国境の厳格化により北宋から契丹へは大規模な人口移動が見られなくなった。これは、第一の意義である国際関係のあり方が第二の意義である契丹国内の民族複合社会のあり方に影響を与えたことを予見させるものであった。

研究開始当初の背景の第二点としては、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「契丹語・契丹文字研究の新展開」への参加があった。これを契機に、研究代表者は「漢人はいかに契丹語・契丹文を使用したのか」という疑問をもった。管見では契丹語・契丹文字を善くしたことが記される漢人の墓誌銘の出土は、現在の中国遼寧省西部(朝陽市)から内モンゴル東部(赤峰市)にかけての契丹本土に偏る。これは、同じ「漢人」でも、五代中原から契丹本土に徙民された人々といわゆる燕雲十六州に唐代以来代々居住する人々では、契丹政権・契丹人との距離が異なることを予見させるものであった。

2. 研究の目的

本課題の研究の目的は、1.の内容を背景として、遼代における漢人徙民(以下、その子孫も含む)の存在形態を解明することにある。

そもそも、契丹(遼)史研究の意義の一つには、1.の冒頭で述べたようにその民族複合社会の実態の解明がある。しかし、この正当な意識は、具体的な研究に投影されると「契丹か漢か」という不毛な二項対立的視点の原因ともなってきた。その中で、本課題が現中国遼寧省西部から内モンゴル自治区東部を中心に居住した漢人徙民を考察の対象とした理由は、彼らがいわゆる燕雲十六州に居住した漢人と比べて様々な点で契丹国家・契丹人に近い存在であったことが予見されることにある。つまり、漢人と言っても一様ではなかったというものである。ここに、漢人徙民の研究が遼代社会の実態解明につながる要因があり、研究の目的とした所以である。

3. 研究の方法

本課題の研究の方法としては、在来の典籍史料の検討の基礎の上に、中国遼寧省西部及び内モンゴル自治区東部出土を中心とする遼代漢人徙民の墓誌銘に関する資料収集と読解・研究を行った。資料収集にあたっては、資料(碑刻ないし拓本)の所在地に実際に赴き調査を行った。資料の所在地とは、碑刻については上記の中国遼寧省西部(特に朝陽市)及び内モンゴル自治区東部(特に赤峰市)であり、拓本については東洋文庫である。

以下、海外調査について述べる。

まず2012年度に行った中国遼寧省西部調査では、具体的には朝陽博物館を中心に調査を行ったほか、朝陽県博物館及び建平県博物館を訪問した。

この内、主たる調査対象であった朝陽博物館は研究代表者にとって事実上初の訪問であり、同館墓誌展示室において下記の遼代漢人墓誌銘を実見することが出来た。

- ・耿崇美墓誌
- ・耿延毅墓誌
- ・耿延毅妻耶律氏墓誌
- ・耿知新墓誌
- ・劉承嗣墓誌
- ・劉宇傑墓誌
- ・劉日泳墓誌
- ・石延煦墓誌
- ・常遵化墓誌
- ・趙匡禹墓誌
- ・韓瑞墓誌
- ・劉從信墓誌
- ・龔祥墓誌
- ・姚璿墓誌

耿氏・劉氏・石氏・趙氏・韓氏・姚氏はいずれも遼代朝陽地区における漢人名家であるが、特にこの中で石延煦墓誌は、五代後晋皇室に属する人物という興味深い人物の墓誌銘でありながら、これまで不鮮明な写真と部分的な釈読しかなされていなかった。そのため、今回の調査を機に新たに研究代表者自ら同墓誌全文の釈読を行い、後述のとおりこれを主たる材料の一つとして学会発表を行った。

次に2013年度に行った内モンゴル調査では、赤峰博物館・遼上京博物館・契丹博物館に訪問・調査を行った。このうち契丹博物館は初の訪問であり、本課題と関連の深い石刻資料の所蔵も新たに確認することができ、特に有意義な訪問であった。ただし、当該の石

刻資料の含めて同館所蔵の資料には未発表のものも多く、ここではその具体的な内容は記さないこととし、先方の資料公開の状況の推移を見守りつつ、問題がクリアされた時点で別途成果を公開していくこととしたい。また、今回二度目の訪問となった遼上京博物館では、蔡志順墓誌銘の拓本を実見することが出来た。これも後述のとおり雑誌論文の主要な資料となった墓誌銘である。同墓誌銘の拓本自体は鮮明な写真が公開されており、釈読自体に困難は存在し無いが、そのスケールを実感することなど、やはり現物を見ることには意義があったと考える。

また上記の二度の中国調査に当たっては、各回に北京市を經由する行程を組み、同市において研究協力者の康鵬氏（中国社会科学院歴史研究所助理研究員）と情報交換を行った。特に、上記の内モンゴル巴林左旗の遼上京博物館と契丹博物館の訪問（特に後者）は、康鵬氏の御周旋無くしては実現しなかった。この場を借りてその旨を明記し、感謝の意を表明しておきたい。

なお、朝陽市・赤峰市訪問時には、現地や経由地である北京市・承德市の関連遺跡等の調査を同時に実施することによって、当該地域の遼代を含めた通史的な歴史的背景への理解を深めることも出来た。

4. 研究成果

本課題の研究成果を敢えて大別すれば、上記のように研究の背景となる契丹の国際関係に関わる研究と、課題の中核となる中国遼寧省及び内モンゴル出土の遼代漢人徙民の墓誌銘を利用した研究に分かれる。ここではまず前者について、後に後者について述べることとする。なお、前者に係る研究は次項の雑誌論文（3）と学会発表（2）（3）、後者に係る研究は次項の雑誌論文（1）・（2）と学会発表（1）である。

まず、前者についてである。雑誌論文（3）では、契丹の主要な対外関係である北宋との関係において特に重要なトピックである澶淵の盟を取り上げた。周知のように、澶淵の盟は西暦1004年に契丹と北宋の間で結ばれた盟約であり、高校世界史でも扱われることのある著名な出来事である。しかし、澶淵の盟は北宋 契丹、契丹 北宋という二通の外交文書の往復で成立しているが、従来その原文についての分析は疎かにされてきた嫌いがある。このような状況に鑑み、雑誌論文（3）では二通の外交文書として文書の書式などから澶淵の盟を詳細に分析し、更に広く関心を持つ人々の理解を促進するために現代語訳も行った。

学会発表（2）では、従来宋代史研究（特に儀礼研究）において等閑視されて来た感のある史料『中興礼書』を使用し、金と南宋の関係について初歩的な検討を行った。『中興礼書』はその名の通り南宋に成立した礼書であり、その中には金の外交使節が南宋を訪れ

た際の儀礼に関する規定・議論も含まれる。ただし、『中興礼書』は一旦散逸し、清代に輯本が作成されたもののその後も抄本が流通するのみで、影印出版されて使用が便利になったのはこの十年程であるという事実があり、そのためこれまで利用が進んでいなかったという背景が存在する。なお、金と南宋の関係は契丹と北宋の関係に大きく規定されており、実際に学会発表（2）でも契丹と北宋の先例に基づいて物事が処理される場合が存在した事実を指摘した。この点で、契丹の対外関係を重要な背景とする本課題の中に学会発表（2）は位置づけられるものである。

学会発表（3）は、契丹と北宋の関係の重要な要素の一つである皇帝（皇室）間の擬制親族関係化について、北京で行われた国際学会で中国語で発表をしたものである。内容としては、北宋後期に執政を務めた曾布の「政治日記」である『曾公遺録』に基づき、従来の通説と異なり、契丹の天祚帝と北宋の徽宗皇帝の間の擬制親族関係が、前者が兄・後者が弟であった蓋然性が高いことを述べた。この発表については、関係者に肯定的な反応で迎えられたほか、論旨を補強する史料の教示も受けることが出来、有益な発表となった。同時に、中国の同世代の近接分野の研究者と交流する機会を得たことから、意義の深い参加となった。

次に後者についてである。まず雑誌論文（2）は、戦前に現中国遼寧省で出土した「劉継文墓誌銘」を主たる史料の一つとして執筆したものである。劉継文は五代十国の北漢の皇族に属する人物であり、このような人物の墓誌銘が現遼寧省で出土したこと自体が学会発表（1）の内容とも関わっている。同論文の内容は、「劉継文墓誌銘」及び「天龍寺千仏樓碑」といういずれも北漢史研究における重要な史料に基づき、特にそこに出現する契丹皇帝に関する表現・北漢皇帝に関する表現・両皇帝間に関する表現に着目して議論を行った。その結果、（1）契丹皇帝は自らのみならず北漢皇帝も「皇帝」と認めていたこと、（2）北漢皇帝は自らのみならず契丹皇帝も「皇帝」と認めていたこと、（3）両者とも契丹皇帝が上位にあると認識していたこと、を明らかにした。これは、当時において複数の皇帝が同時に共存しており、「唯一の皇帝」というような理念が顧慮されていないこと、また複数の皇帝が序列をもって存在していたこと（具体的には冊封関係と言ってよい）が明かにされたものであり、いわゆる東アジアにおける国際関係理解に一石を投じるものと考えている。

次に雑誌論文（1）は本課題の最も核心となる成果である。具体的には、典籍史料（『遼史』）から高位の契丹人に近侍する漢人は契丹語・契丹文を解する必然性があったであろうことを明らかとし、更に石刻資料から高位でなくとも契丹人に近い位置で活動する漢

人についても契丹語・契丹文を解する必然性があったであろうことを述べた。その際、特に遼上京付近で出土した「蔡志順墓誌銘」を重視して議論を行った。蔡志順は遼代後半から末期の人物であり、遼上京周辺の出身で、終生その付近で活動した。彼の官歴でまず注目されるのは、彼が枢密院の「通事」及び「契丹令史」に任じられたことである。これは彼が口頭での契丹語と書写する契丹文の双方を善くしたことを示す。また、彼が皇帝の実弟との関係から官途に就いたことや、皇帝陵を奉じるための州（奉陵邑）の節度使を務めていることにも注目した。要は、彼が契丹人に近い位置で活動したということである。なお契丹人に近侍する漢人とは、地域的に言えば燕雲十六州以外の特に遼上京・中京周辺に居住する漢人を指すものである。つまり、契丹語・契丹文の使用を一つの指標として、遼代の漢人がその立場や地域によって決して一様な存在ではなかったことを述べたこととなる。

次に学会発表（１）は五代後晋の皇族石氏が王朝の滅亡後に契丹に連行された後の関連資料を検討したものである。彼らに関連する墓誌銘は、既述の「石延煦墓誌」のほか、現在は遼寧省博物館の所蔵に帰している「石重貴墓誌」や近年出土が報じられている「李太后墓誌」・「安太妃墓誌」など皆概ね中国遼寧省朝陽市管内で出土している。同管内は石氏に限らず遼代において劉氏・王氏などの五代華北の軍閥の末裔や耿氏・趙氏・韓氏・姚氏などの遼初以来の漢人門閥が多く居住した地であり、石氏もそのような家系の一つとして理解できる。そして、このような地域的性格は遼上京・中京周辺とは異なるものであり、上記のように燕雲十六州の漢人と契丹本土の漢人の性格が異なるのみならず、契丹本土の漢人も必ずしも一様な存在ではないことを一定程度明かにしたものである。

以上から、研究の背景である契丹の対外関係について従来よりも更に明らかにすることが出来たほか、遼代漢人の存在形態の解明という中核的な研究目的についても、前項で具体的に述べたような方法により、概ね申請書どおりに研究を遂行できたものとする。つまり、ほぼ雑誌論文（１）について述べたことの繰り返しとなるが、立場として言えば高位の契丹人に近侍する漢人が契丹語・契丹文を解する必然性があったのみならず一般に契丹人に近い位置で活動する漢人についても契丹語・契丹文を解する必然性があった可能性が高く、地域的に言えば燕雲十六州以外の特に遼上京・中京周辺に居住する漢人が契丹語・契丹文を使用できた可能性が高いという当初の仮説が十分に成立しうるものであることを述べる事が出来たと考える。これは、遼代漢人と言っても決して一様でないことを述べたものであるが、このことは他の時代の漢人と非漢人との関係についての理解、そもそも漢人とは何かと言う問題について

の理解、更には広く世界の各地域における遊牧民支配層と定住民の関係についての理解についても資するものであると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

(1) 毛利英介「契丹令史蔡志順」(『関西大学東西学術研究所紀要』47、2014、pp.293-317) 査読無し

(2) 毛利英介「冊封する皇帝と冊封される皇帝 契丹(遼)皇帝と北漢皇帝の事例から」(『関西大学東西学術研究所紀要』46、2013、pp.213-228) 査読無し

(3) 毛利英介「澶淵の盟について—盟約から見る契丹と北宋の関係」(『アジア遊学』160、2013、pp.44-55) 査読無し

〔学会発表〕(計3件)

(1) 毛利英介「遼代武威石氏関連史簡介」(遼西西夏史研究会、東北大学、2014年3月22日)

(2) 毛利英介「南宋高宗皇帝崩御と金使甲祭儀礼 中興礼書を中心に」(宋代史談話会、大阪市立大学、2014年2月15日)

(3) 毛利英介「遼宋皇帝間擬制親族関係小補」(宋代政治史研究的新視野国際学術研討会、北京大学、2013年9月3日)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

毛利英介 (MORI, Eisuke)

関西大学・アジア文化研究センター・非常勤研究員

研究者番号：10633662